論考 茂吉と文明

本林勝夫著

論考 茂吉

本林勝夫著

明治書院

本林勝夫（もとばやし　かつお）

大正8年石川県に生まれる。昭和22年東北大学文学部国文学科卒業。昭和27年同大学院修了。共立女子大学文芸学部教授を経て，現在，同大学名誉教授。平成3年『斎藤茂吉の研究－その生と表現』で第2回斎藤茂吉短歌文学賞を受賞。

主な著書に『斎藤茂吉－人と作品』『斎藤茂吉集』（日本近代文学大系）『斎藤茂吉論』『斎藤茂吉』（近代文学注釈大系）『近代歌人』『斎藤茂吉の研究－その生と表現』その他がある。

論考 茂吉と文明　　定価6,800円（本体6,602円）

平成3年10月25日　印刷
平成3年10月30日　発行

編著者　本林勝夫

発行者　株式会社 明治書院
代表者 三樹彰

印刷者　大日本法令印刷株式会社
代表者 田中忠

発行所　株式会社 明治書院
東京都千代田区神田錦町1-16　郵便番号101
電話03(3292)3741(代)　振替口座東京3-4991

© K. Motobayashi 1991

星共社製本

ISBN4-625-46046-8

目　次

I　斎藤茂吉・人と歌と

茂吉と独語の歌――萬葉の歌と古代的静寂――……三
1　長崎の茂吉……三
2　寂しい独語……六
3　萬葉集巻八の一首……九
4　萬葉と茂吉……三
茂吉随筆の女性たち――滞欧随筆を中心にして――……一五
1　「鷗外物の『女』小感」のこと……一五
2　「百物語」の太郎……一八
3　ウィーン時代の一女性……二三
4　ミュンヘンの少女など……二九
茂吉・飲食と歌と……三五
1　食と信仰と……三五
2　鰻のこと……三八
3　茂吉と飲啄……四一
4　飲食と作歌……四五

〈応酬三題〉

一　「仏法僧鳥」をめぐる応酬――片上伸との論争――……四八

二　「巌流島」顚末――菊池寛との応酬――……六五

三　「心に見えてオントース・オン」――阿部次郎の歌をめぐって――……七七

茂吉の歌と鷗外――「係恋」と「陣亡」と――……八四

1　「係恋」の語……八四　2　「係恋」と「あこがれ」……八九

3　「陣亡」の馬……九四

茂吉の歌・詞林拾葉……九八

一　「潮沫のはかなくあらば」……九八

二　「酒の糟あぶりて室に食むこころ」……一〇四

三　「びようびようと犬は鳴くにあらずや」……一一二

四　清音と濁音――谷崎潤一郎の「気になること」など――……一一七

五　「蟬も身に沁む晩夏のひかり」……一二四

六　『白桃』の一首……一二九

茂吉短歌私注――『白桃』『暁紅』『寒雲』――……一三四

ショオペンハウエル笛ふきしかど……一三五
いかなる人の妻とおもはむ……一四〇
しらたまのをとめ現はれ……一四三
ひれ伏すときに何は善けむぞ……一四六
涙を舐むる獅子さへもなし……一五〇
口籠して馬はいななくこともなし……一五三
ああそれなのにねえ……一五六
むらさき葡萄のたねは……一六一
見るともなしに見てしまひけり……一六八
天の命も怖ぢておもはず……一七一
もののおもひを遂ぐるごと……一七四
飛行機ひとつ墮ちゐたるのみ……一七七
落ちのびし王にむかひて……一八一
リユクルゴスの回歸讃ふるこころにも……一八四
純全にも限ありてふことは悲しく……一八八

Ⅱ　土屋文明・五章

土屋文明論序説——「槻の丘には待つ者が有る」——……一九七
1　文明最晩年の歌……一九七
2　『青南後集』における二つの死……二〇三
3　学僧仙覚と武蔵の国……二〇六
4　慈覚大師円仁のこと……二一一
5　横たわる人・文明……二一五
「大和鴨山」説の発想——文明とその思郷——……二一九
1　「越後岩船」の歌……二一九
2　「瀬波岩船」と昭和十六年の文明……二二六
3　思郷と「大和鴨山」説の発想……二三〇

文明と伊予の歌——「伊予の天山」をめぐって——……二〇六
1 「天山」の歌……二〇六　2 茂吉のこと……二一
3 文明とその独詠歌……二一五
文明と「みみらく」幻想——山上憶良に関連して——……二一八
1 文明と山上憶良……二一八　2 「美彌良久」と「美彌良久」……二二三
3 「みみらく」伝承……二二七　4 幻想の「ミミラク」……二三一
土屋文明の歌・私記……二三五
(一) 「唐變木」の一首……二三五
(二) 「伽羅の實のかがやくばかり」——茂吉展墓の歌——……二四一
(三) 「蘭めづる楚のことばにも通ひがたし」——文明と魯迅——……二四六
(四) 「采ふり木」の歌——「稀に語り喜びあひし友」——……二五五
(五) 「二十年ありありて残る無名撰文」……二六三

Ⅲ 茂吉と勇

歌人吉井勇小論……二七三

一　勇と谷崎潤一郎……二七三
（菊の枕花　二人の耽美派作家）
二　『酒ほがひ』まで……二八〇
（祖父・父のこと　環境と文藝趣味　歌人勇の生い立ち）
三　『酒ほがひ』とそれ以後……二九三
（享楽耽美の歌人　歌風の停滞　木枯しの勇　晩年の勇）
四　吉井勇の文藝……三一二
茂吉と吉井勇――「こがらし」の歌をめぐって――……三一七
1　文明の見た茂吉と勇……三一七　2　茂吉の勇評……三一九
3　茂吉・勇の交遊……三二三
あとがき……三三〇
短歌索引……三三五
主要人名索引……三四五

I

斎藤茂吉・人と歌と

茂吉と独語の歌

——萬葉の歌と古代的静寂——

1　長崎の茂吉

長崎時代の茂吉に「寓居独語」という漫筆がある。もと「短歌雑誌」（大正九・一）に「独語抄」と題して載った随想だが、書き出し部分に少し手を入れたくらいで、収録した『童牛漫語』との間には異同はほとんどない。

内容は、たまたま前年に長崎を訪れた「Yさん」と「A夫人」、つまり与謝野寛・晶子夫妻の言動についての感想を中心としたものだが、なかにこれとは直接関係のない二、三の話がある。その一つ。

自分は大正六年十二月に長崎に赴任し、下旬から小さな家を借りて女中と二人暮らしをはじめたが、客のない晩は早くから床につくのを例としていた。

大晦日の夜に、心が夢と現の間にゐて仰臥してゐた。鐘が聞こえる。不思議に思つてゐると、心がだんだん清明になつて来た。鐘の音は仏寺の鐘と天主堂の鐘と、大きいのと小さいのと、濁みたのと澄んだのと、遠いのと近いのと、周囲の群山に木魂して、長崎ぢゆうの鐘が一度に鳴り出したのである。ああ除夜の鐘だ。遠く来て聞

く寂しい鐘の音だ。しかしいい鐘の音だ。聞いて好いことをした。こんな事を思つてゐると、何百といふ鐘がいつの間にかやんで、もとのしづかに戻つた。

東京を離れてすぐに迎えた歳晩である。長崎という土地柄もあって、そこで聞く除夜の鐘にはひときわ印象深いものがあったらしい。私は、この部分を読むごとに、最終歌集『つきかげ』の歌を思い出す。

しづかなる天にむかひてひびかなむキリストの鐘も佛陀の鐘も　（一月一日、昭和二四）

新年詠だが、そして特別な歌でもないが、何か老いた茂吉が自らの長い生涯の余韻を聞いているような、不思議な感じが漂ってくる。あるいは時に朦朧とする意識のなかで遠い昔長崎の夜に聞いた除夜の鐘を蘇らせているのかも知れない——そんなふうに思うのである。それにしても「寓居独語」の文章は寂しい。事実、茂吉自身もこの文章中でしきりに「寂し」の語を連発している。では、その寂しさとはどういう性質のものか。例えばこんなことを言っているところがある。

古い古い時代おくれな虚仮ものを製作してゐても、やはり進歩した若い者の作物などを眼下に見くだしてゐることを好きな人が居る。本人はいい気で居ても、実はみじめな有情に過ぎない。僕は常にかう思ふ。僕らの先達の蹤を見ると、そこに涙のこぼれるやうなことがある。ミケランジエロの作に対した時の老匠レオナルド・ダ・ヴインチの心持のやうな、それからロダンが、レムブラントの晩年の作に対した時のやうな、ああいふ心持をどう見るであらうか。僕は時々あるひは常住にかかる心持を有つてゐなければならない。さういふ寂しい緊張した心を体験したいのである。

大正八、九年と言えば、茂吉の作歌活動が停滞し、それが深刻な行き詰まりに直面していた時期である。そういう状況にはいろいろ原因もあったとは思うが、最も大きいのは『あらたま』の編集をしながら、初期の、流行に多少巻

きこまれた作風への反省が働いていたことだろう。つまり、ここで茂吉は「流行」から「不易」の境へと転換をはかりながら、なお苦しんでいたのではあるまいか。作歌活動よりも「写生」説にかかわる論が先行した形であり、そこに眼高手低のようなものを意識していたのかも知れない。

同じ頃に書いた「冬夜漫筆」（「福岡日日新聞」大正九・一・一一～一二）でも同様な心境をもらし、

対他の関係に立つて、余所行でない振らない臓腑をさらけだした交流をしようとすることは極めて難いことであつた。これは単に相共鳴する時のみではない。相反撥する時に当つても亦さうである。そしてこれは単に今人とは限らない。古人に対した時であつても亦さうである。

と、いわゆる「肝胆相照（かんたんさうせう）」の困難についても語っている。そのような交流が「難いことであつた」と過去形で述べている点でも、当時の茂吉の心境が窺えるのではあるまいか。

藝術の鑑賞でも、理屈では常に高いものを目指すと言っても、「鑑賞は要するに『自己』を観てゐるのだから」、自分の精進が出来なければ空念仏に終わる。

しかし僕等はいつも高いものと深いものとを目がけて、常に寂しい心を持つてゐねばならぬとおもふがどうであらうか。そして『レオナルド』伝に書いてある、老匠レオナルド・ダ・ヴインチが羅馬の殿堂で、ミケランジエロの描いた壁画に対した時のやうな、「気絶するやうな」心持を時々経験せねばならぬのではあるまいか。

と同じ趣旨を繰り返し語っているのである。そうしてみれば、当時その選歌欄に添えた茂吉の歌が「赤彦周囲の青年たちにひどく評判が悪かつた」のに対し、「赤彦はさうでない。茂吉は何か考へてゐる」と言ったという話（柴生田稔『続斎藤茂吉伝』）も十分首肯出来るであろう。

赤彦の、のちに主唱する「寂寥相」が『あらたま』後半からこの頃にかけての茂吉の歌や文章とどう関連するかは

簡単には言えない。しかし、茂吉がおのずから直面した状況がかりそめのものではなかったことを、さすがに、赤彦は察知していたと言わなければならない。そして、以上に窺われるような茂吉の心境が、晩年まで一貫するものだったことは、戦後に書いた次の文章からも知ることが出来る。

私は三たびミラノを過ぎて、かのレオナルドウ・ダ・ヴインチの立像を見た。その立像の周囲には門人の立像がある。私は其等門人の立像を見つつ佇立一時間に及んだことがあつた。その心境は今でもつづいてゐる。

（「余言」、「余情」第五輯、昭和二二・一〇）

また時に「藝術は枯淡のなんのといっても覇気がなくてはだめだよ」と言いながら、こうも言っているのである。

しかし人間はある程度まではこれはかなわないという気持ちをもっていなくてはいけない。レオナルド・ダ・ビンチのような大家が、バチカンでミケランジェロの壁画を見て、しおしおとなるところがある。あれがいい。ああいうえらい大家でも自分の藝術に対して悲観しているところがある。

（佐藤佐太郎『斎藤茂吉言行』）

2　寂しい独語

ところで、「寓居独語」にはこれと直接関係がないように見えるが、こんな話がある。

四つになる男の児が、寝惚けて深夜に泣き出した。しばらく電車あそびなどをして相手になつてゐたが、男の児の母もそのうち寝てしまつて、誰もかまはない。夜はしんしんと更けしづまつてゐる。男の児はしばらく電燈を見つめて黙つてゐた。そのうち、『まだ夜なの』といひ出した。誰も返詞をしない。まだしばらく黙つて電燈を見つめてゐた男の児が『早く夜が明ければいい。早く夜が明ければいい』かう、間を置きながら繰返す。けれ

ども誰も返詞をしない。繰返していふ男の児の独りごとは、いかにも寂しい。寂しい独語だ。

僕は眠ってしまった振をして、黙って聞いて居たけれども、内心には深い感動を受けて居た。

文中に出てくる幼児は作者の長男だが、直接名前を記さず、「男の児」と言い、また「男の児の母」と書く。そのために長男であるこの幼児は、同時に「男の児」一般となり、語られている状況が客観的に、あざやかに浮かんで来るのである。

私はこの短文に優れた短篇小説を味わったときのような感動を覚える。例えば志賀直哉の「好人物の夫婦」（「新潮」大正六・八）の有名な書き出しの部分――。

深い秋の静かな晩だった。沼の上を雁が啼いて通る。細君は食台の上の洋燈を端の方に引き寄せて其下で針仕事をして居る。良人は其傍に長々と仰向けに寝ころんで、ぼんやりと天井を眺めて居た。二人は永い間黙って居た。

それぞれ状況は違っているが、簡潔な文章で夜の静かさを見事に描いている点では、どこか共通するような感じを受けるのである。

ただし、引用した部分に限って言うならば、志賀の文章は静かさを静かさとして描いている。沼の上を渡って行く雁の啼き声や、黙っている夫婦それぞれのしぐさ――それらが秋の夜の静かさを際立たせているのは確かだが、同時にそこに透明な空気に包まれた、平安で充足に満ち満ちた雰囲気を感じとることが出来る。

しかし、茂吉の場合、文章から感じとる静かさの性質には少し違ったものがあるようだ。言うならば、人間の存在そのもののもつ寂しさとでも言おうか、そういうものがこの静かさの底に流れている。

もちろん夜と言っても、深夜だということもあろうが、清澄さとはまた別の濃密な夜の空気があり、一種の厚みを

もった静かさがある。そして「しんしんと」静まりかえっているその空気をきわだたせるのは「男の児」の泣き声であり、そのひとり言なのである。「早く夜が明ければいい。早く夜が明ければいい」こう繰り返す幼児の呟きは、すぐ淵のような深夜の静寂に吸いこまれてしまう。吸いこまれてしまうから、そこに何とも言い難い寂しさのようなものが反響してくるのである。

太古の人間が夜明けを待ちのぞんで何度も呟いたような、切実で無垢な言葉、それが「男の児」のひとり言からひびいて来るようである。もちろん幼児は自分の言葉に他者の反応を予期しているわけではないし、寂しさや孤独感というようなものを意識しているわけでもない。泣きやんだ後、誰に言うともなく、ひとりで呟いているのに過ぎないのである。それを作者は眠ったふりをしながら聞き、そこに言葉のもつ寂しい響きを感じとり、深く心の底にこだまするものを意識している。私が感動するのは、そういう詩人の感受性のあり方なのである。

幼児の呟きに、作者は人間の発することばの最も純粋で無垢なるものを聞きとっている。同時に無心無垢なるものにしか感じとることの出来ないような寂しさをも感じとっている。

かつて茂吉は「言語発生の因は吾等の孤独ならざることに出発してゐる」（「ひとりごとの歌」、大正二・三、『童馬漫語』）と言った。しかし、これは常識的な意味での言語の伝達機能を述べたに過ぎまい。だから、そう言いながらも近代人としての彼は、以下のような感想を告白しなければならなかった。

吾等のやうに気の弱い、はにかみ勝のともがらは、ひとり言の間ぐらゐは我儘でありたい。物をいぢり遊びながら、独り物いふ童幼の如く、公けにかかはりなき吾等の〝Selbstgespräche〟を人知れず尊重したい。

さらに言う。自分はかつて便宜上歌を「対詠歌」と「独詠歌」に類別した。元来歌は、「対詠歌」から始まっており、古人のこの種の歌に優秀なものがあるのは偶然ではない。広い意味からすれば、すべての短歌は対詠的な性質を

帯びたものである。しかし、

　茲でいはうとするのはもつと深くもつと狭義にしたものである。末世に生きてゐる現在の吾等は、独語の色調を帯びた歌を詠む場合が多い。そして少しも苦痛を感じない境地にゐるのだ。しみじみと恋をした事もないゆゑに、縦しまたあつても古人の様に対者にのみ示すやうな幸福を感じ得る世とは大分遠く隔つてゐる。独語の色調を帯ぶるのはおのづからである。従うて、独語本来の性質たる、無顧慮と純正とを希ふのである。

茂吉は、たとえば萬葉集の歌に見る「児童が専心に遊んでゐるやうな態度」（「萬葉の数首」、『童馬漫語』）、村田春海の言う「あるがままをいひ出で、幼くはかなきが如くにして心深し」といった純粋なことばの働きを独語の歌に求めようと願うのである。

3　萬葉集巻八の一首

ところで、「寓居独語」に見るような言葉に対する感受性のあり方は、また茂吉の萬葉集についてのそれにも通じている。彼が単純で直接的な萬葉の歌のひびきを高く評価したのも、おそらくはそこにあったに違いない。たとえば、すぐ連想されるものに萬葉集巻八の有名な一首がある。

　夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かずいねにけらしも　（一五一一）

単純と言えば、これほど単純な歌はないかも知れないし、事実、萬葉とくにその初期にはこうした作がらのものが多い。

さて、これについては茂吉は『萬葉秀歌』の中で言う。一首はいつも妻を求めて鳴いていた鹿が妻を得た心持だが、